

令和3年の師走も押し迫ってきた。3月や5月なら、上巳の節句や端午の節句など目出度い行事をすく思い出せるが、12月には存外イメージが湧かないと言う人も多い。最近出された

『大名の江戸暮らし事典』(松尾美恵子・藤實久美子編)を繙くと、江戸城や各藩邸では、重要行事として煤掃が13日に行われたことが分かる。

『貞丈雑記』1巻、島田勇雄校注、東洋文庫) 厄介ごとを自ら招かないという戒めであろう。しかし、自分が入れなくても、平気で自分の家に煤竹を入れてくる他人もいる。この無礼を放置する者はいないはずだ。

芭蕉は擲擲したのだらう。武家に家来として仕える用人はしばしば味噌や味噌と通称されたが、この武骨者も袋をかぶり蓑を着て煤払いをした。

国の場合も同じである。新政権の岸田文雄首相、林芳正外相の北京五輪への外交的態度表明は遅れていた。日本政府は煤竹を持ち出すのが遅すぎないか。いわゆる「喧嘩過ぎての棒干切り」(時機に遅れては効果が無い)にならないことを切に望みたい。



煤払いと政治

・鈴木健一校訂、ちくま学芸文庫) はさらに、ほぼ同時期に煤払いと開帳を行った例として、目黒不動尊、浅草寺観世音、谷中天王寺毘沙門などを挙げています。江戸時代の事例は、おそろ

島田勇雄ほか訳注、平凡社東洋文庫) によれば、家の梁はみな煙に染まると真っ黒になり、そこに塵埃が混じったのを「すす」と呼んだのである。かつては貴賤を問わずに、12月13日に煤払いをする慣習が普通であっ

る大工かな」という名句がある。普段は依頼された仕事で忙しい大工が、年末の煤掃ともなれば、家族に催促されて家の棚を作るなど、体裁を脇に措いてまめに働くというのだ。これは年末でないといえぬ光景だと

あれこれの家具を直して、行灯の紙を張り替えるなどして一日が終わる。たづくり膾、浅漬の香りを楽しみながら膳を終えるのも煤払いの日の恒例だったらしい。一日の疲れからすぐ高軒をかいて睡眠する様子を芭蕉が詠ったとされる句には、風情がある。

すすはきやくれゆく宿のたか いびき
新宅であれば、3年間は煤竹を入れないという古来からの言

(やまうち まさゆき)